

歩けばわかる まちの魅力

高田の雁木 始め知識



高田の雁木通りは日本一の長さ。「北越雪譜」にも登場し*1、城下町高田を象徴する景観であるとともに、「ゆずり合い・助け合い」の心が形になった文化遺産であるといえます。



今こそ小雪の年が続いていますが、高田のまちの降雪量の多さは、平野部の都市としては、昔から群を抜いていました。なにしる、あまりの大雪で家並が見えなくなってしまう、旅人のために、「この下に高田あり」と書かれた高札が立てられたという話が残っているほどです。

「雁木」は、そんな雪国の冬期間の通路として造られたもので、新潟県はもとより東北から山陰まで広く分布していました。東北の盛岡・弘前・黒石・角館の城下町では「コミセ」、山形の米沢・鶴岡・酒田では「コマヤ」と呼ばれています。明治期以降、時代の波にもまれ消滅した地方が多い中で、高田のまちには今日も圧倒的な日本一の長さの雁木通りが残っており、子どもたちや、お年寄りにも便利で安全な通路として使われています。



寛保3年(1743年)の記録によれば、高田城下で雁木が造られたのは、慶長19年(1614年)の高田開府より後の松平光長公の時代(1624-1681年)とされています。

寛文5年(1665年)真冬の大地震では、4mを超える積雪の重みも加わり城下全体が壊滅的打撃を受けましたが、地震の後に家老となった小栗美作は、幕府から借りた資金で城下町の復興事業を行い、この頃城下町に雁木が完備されたと言われています。



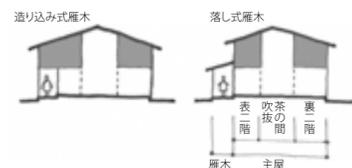
雁木の種類

初めの頃の雁木は、平屋の家屋の軒先を道路側に延長して柱で支えるだけのものではとされています。その後、建物の高さが高くなるにつれて、雁木の通路上部を物置などに利用できる「造り込み式雁木」の形態も生まれてきました。当初雁木上部の部屋は、窓もなく天井も低いツシ2階でしたが、後に窓をとって使用人の部屋などとして利用する家もあらわれました。明治以降になって本2階建ての町家が普及すると、表2階の採光と通風を確保するために、平屋の雁木を主屋に付け足す形の「落し式雁木」の形態が主流となっていきました。雁木自体は主屋にくらべて傷みが早いので、軽微な造りで容易に改修ができるようにとの工夫と考えられます。



雁木とまちづくり

雁木は、町家で生活を営む各戸が私有地を提供し、雪国における生活通路として重要な役割をはたしています。上越市が平成15年に行った市民アンケート調査では、「雁木と雁木通りの保存・活用が必要だ」という声は、市民の約9割にも上っています。しかし、雁木が形作られた時代とはライフスタイルが大きく変化する中で、雁木が次々と姿を消しているのも現実です。江戸時代以来約350年間受け継いできた高田のまちのシンボルを、これからどのように受け継いでいくのか。今を生きる私たち一人ひとりが考えていかなければなりません。



*1 北越雪譜は南魚沼市塩沢生まれの文人、鈴木牧之(1770-1842)の名著で天保6年に初編刊行。(岩波クラシックス所収)

まちを歩いてみる.....ぶらり散策で発見! まちのお宝

旧今井染物屋界隈の歩き方

旧今井染物屋のある大町筋は、職人さんのまちです。今でも塗師、建具、紋屋などの看板を見ることが出来ます。ここから大町筋へまわれば、明治の劇場や昭和初期の洋風な商店など、モダンな高田のまち筋を眺めながら歩くことができます。



浄興寺大門通り界隈の歩き方

本町筋から歩いて儀明川に架かる浄興寺の山号に由来した「歡喜橋」を渡ると、かつて海産物問屋街だった仲町の角には落ち着いた風情の料亭が見えます。その先の黒板扉の料亭を見ながら歩けば、目の前には浄興寺の山門。ここは60余の寺院がある寺町です。



青田川界隈の歩き方

赤いトングリ屋根の教会を過ぎ、お城の外堀だった青田川に沿って上(南)へ歩けば、武家屋敷の面影を残す石垣や植込みのあるまちなみに出会います。四季折々の高田のまちの自然を楽しみながら歩けば、旧師団長官舎の裏手へ。この洋風建築でひと休みして、本町筋の雁木通りへ出ましょう。



江戸時代には北国街道の伝馬宿で、佐渡の金を江戸に運ぶ道中の御金蔵がありました。

この界隈には、十返舎一九の「金の草鞋」に登場する鮎屋や、松尾芭蕉の句碑、「時の鐘」など、高田のまちの歴史を物語るものが数多くみられます。



高田 自慢の味



謙信公の川渡餅

上杉謙信と武田信玄の川中島合戦にちなみ、11月30日と12月1日限定販売のあん餅。昔は、小学生の売り子が早朝から独特の売り声で歩いたものです。



やっぱり かまぼこ

雪肌の白身に散らばる褐色のキクラゲ。シンプルながらも美しい姿形、淡白な味わいと歯ごたえが自慢です。桜色の鮭をまとったものは、華麗な逸品。

お正月の水羊羹&寿羊羹

上越も冬季に水羊羹を作る土地柄で、「雪かきの後、こたつにはまって冷たい水羊羹」は冬のうれしいおやつです。お年始の手土産は上越独特、白餡仕立ての「寿羊羹」。

よってきない! 雁木の朝市

観光朝市とまったく違う雰囲気は、雁木の連なる大町通りで開催の二・七、四・九の定期市。地元野菜に秘伝の漬物、海産物から日用品が勢ぞろい。高田言葉が交わされて、農家のおかあさんたちの元気に感動。「まけとくわね!」



思ひ出写真館

高田のまちには、新しい時代に合わせて町家の外観を改装したり、木造洋館だったり、珍しい鉄筋だったり、モダンで素敵な建物がたくさんありました。



百貨店



タクシー会社



食料品店



衣類店



ホテル

*大正から昭和初年に出版された写真集より



江戸時代中期の高田城下町 上越市立高田図書館所蔵資料より

高田のまちのかたち

高田のまちは、徳川家康の六男松平忠輝公によって、慶長19年(1614年)に築かれた高田城の城下町として整備されました。わずか4か月で完成させたお城は石垣を用いず、天守閣もありません。

城下町の特徴は、東側を除きお城を凹字型に囲むように町が配置され、並行する南北2kmの通りが5本もあることです。そのメインストリートには北国街道を通し、問屋や商店、旅籠が立ち並び、それぞれ職業に応じて、奥行きが長く大きな吹抜けがある町家に集住しました。その家々の軒先を伸ばし、公共の通路に提供する雁木通りは、日本一の長さを誇り、冬の雪から人々の生活を守っています。

城下の一番西には寺町が置かれ、お城のシンボル本丸三重櫓からは、夕日を背にして浮かびあがる寺々を拝することができたといわれています。寺町には、今日も60余の寺院が立ち並んでいます。

高田は藩主榊原家で明治維新を迎え、まちには地域の中心商業都市として映画館や洋風の商店が生まれ、新しい建物も立ち並ぶようになり、近代都市として変貌していきます。まちを歩くと、現役最古といわれる映画館やモダンな装飾を施した建物を見ることが出来ます。

編集委員 企画:太田均 執筆:佐藤和夫、関由有子 イラスト:ひぐちキミヨ

上越市 文化振興課

〒943-0832 新潟県上越市本町3丁目3番2号
高田まちかど交流館(旧第四銀行高田支店)内
TEL 025-526-6903 FAX 025-526-6904